

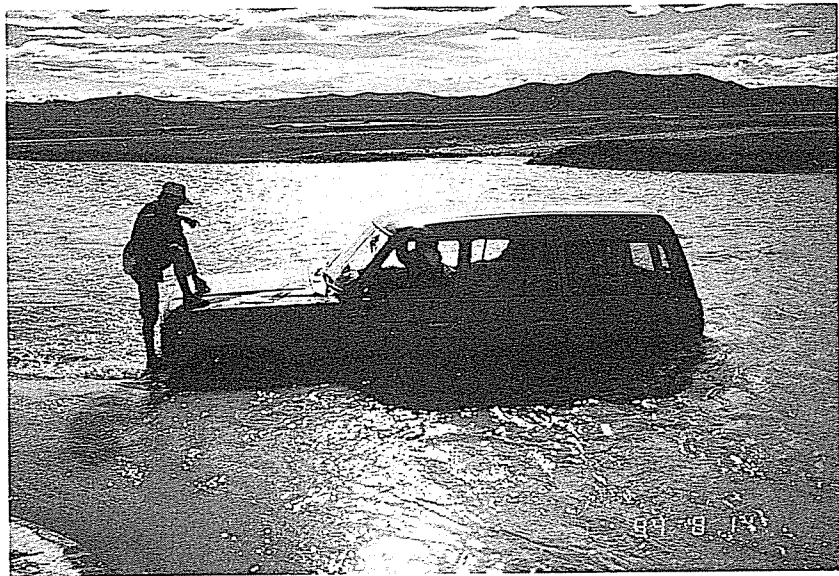
チベット高原の旅①

シベリア・中央アジアの視点から

加藤 九祚

四、過酷な自然の中で

八月十一日九時十五分、出発。四〇キロ走った後の大草原で、黒クビツルを数羽見かけた。十時四十五分ホルという集落に着いた。ここにも壁に多くの風力マニ車をとりにつけた建物があった。標高四四五〇メートル。雨が降り、寒かった。晴れていれば、このあたりからでも、カイラス山がよく見えるという。途中にもラプツェは、たくさんあった。チベット全土では数万にもほるかも知れない。やがて、青空が出た。



増水したバヤンツァンボ川で立往生

夕方、バヤンツァンボ川（ヤールツァンボ川の支流）をジープで渡るとき、私の乗った先頭車が勢いよく濁流を突進したままではよかったが、流れの中ほどでエンジンが止まってしまった。私は一時間くらい車の中に閉じこめられ、座席の上まで水につかり、後部の荷物は水びたし、カメラとフィルムだけを抱えて中腰になった。同乗の平林さんと韓さんはボンネットの上や車の屋根にのぼったが、私はそれもできずに救いを待った。

日も落ちた九時半頃、チベット人のドライバーら三人に支えられて、車の窓から出て、胸まで水につかりなが

ら岸にはいあがった。私の腕を抱えたチベット人たちもぶるぶるふるえていた。仲間たちが乾いた肌着や羽毛の寝袋などを出してくれて助かった。その夜はジープの中で眠ったが、村木さんにはウイスキーをねだった。私は五十年近く前の一九四六年春、シベリアの抑留生活のとき、まだ氷片の流れている急流に落ち、もう少しで凍死するところだった。そのとき、親しかったロシア人将校がコップ一杯のウォッカを持ってきて、飲まないと肺炎になると言ってくれた。私は、それを思い出してウイスキーを飲んだ。こうなると、ウイスキーはかけがえない薬品だ。朝方四時頃、ひどく息苦しくなり、水を飲みたかったが、自分の持合わせの水はもはや底をついていた。同じジープで眠っていた平林さんを起こして、「死にそうなほど息苦しい、どこかに水はなかるうか」と頼んだ。彼の手持ちもなかった。彼は車の外へ出て、たまたま見かけた日暮さんから水をもらってくれた。命びろいした思いだった。

八月十二日の昼頃、水が少し引いたところだなんとかジープは川を渡ったが、別の一台が岸の手前でエンコし、

エンジンの整備に昼間のほとんどを川辺で過ごした。その間は、濡れた衣服などをしぼって干した。トラックの方は、上流へ向かい、パヤンツァンボ川の支流を幾つも渡るといふ方法をとった。夕方近くジープ隊は出発、暗くなってパヤンという集落のチベット人の一家に泊めてもらった。仲間の一部は家畜小屋にワラぶとんを敷いて眠った。その夜は一晚じゅう土砂降りの雨だった。この家には、旅びとを泊めるための用意もあると思われた。日本で言う木賃宿だ。翌朝は、チベット人の常食であるツァンパとバター茶を食べた。雨は止んでいた。

平林さんがポラロイドカメラを持参していたため、たちまち集落じゅうに知れわたり、多くの人たちが盛装でやってきて、写真をほしがった。娘たちは、私たちのドライバーたちとも実になれなく接していた。全体に女性たちは貧しさの中にも堂々と屈託なくふるまっていた。本で読んだチベット社会とは、ちがうと思われた。ほろをまとった老男女が、頭をつき合わさんばかりにして話しているのも、ほほえましい光景だった。若い男たちは山で放牧しているのか、ほとんど見あたらなかった。

服従しなければならない」といった諺がある。貧しい女性たちは、迷信で禁ぜられている耕作以外のすべての仕事にたずさわった。

結婚は宗教的というよりは、むしろ占星術や迷信と深く結びついていた。男性側は女性側の両親に婚資を送る必要があったが、それも占星術の結果、これが良縁であると決められてからのことであった。北部チベットの牧畜地帯では、少女の平均的な値は、ひところはヤク二十頭で、その代金は婉曲に「養育費」と呼ばれていた。貧民の場合には結婚式なしのことも多かった。男子のかなりの数が僧籍に入って結婚しないために、全体として独身男性が多く、男女関係はきわめてオープンであった。裕福な階層では、男性は妻以外の女性と自由に交渉もできたが、女性はきびしく貞節がとめられた。独身のラマが多いこともあって、婚姻外の子どもの出産も少なくなかった。これは、子どもを持つことがすべてに優先していたので、全体としてはむしろ歓迎された。こうした状況はシベリアのトゥワ人なども同じで、ロシアの民族学者ワインシュテインは、婚姻外の子どもをもつ女性は、

私たちの泊まった家の老母は、未亡人と思われたが、体を動かしている間はいつも調子をとるように、なにかの経文を唱えていた。子ども二人いる若奥さんの夫は、車の運転手として出張しているとのことだった。若奥さんは自分の夫が運転手であることを誇りにしているように見うけられた。ここにも集落の中央に大きなラブツェがあった。

*

かつてのチベット社会の最大の特徴は、転生活仏制とされるが、民族学的に興味深いものとして女性の地位と男女関係の問題がある。チベットでは、女性は「劣った生まれ」とされ、涅槃に入れないものとされていた。そこで女性たちは、「私が女性ではなく、男性として生まれ変れますように」と祈ることが少なくなかったという。チベットでは子どものいないことは大きな不幸とされ、一家の富は男の子の数ではかられた。ただし、これはなにもチベットに限ったことではない。シベリアや中央アジアでも同じことだった。チベットには「男は気の触れぬ限り好きなことができる、女は口のある道具のように



チベットの祖母とチベット犬

妊娠能力があるということで、むしろ歓迎されたとも報告している。きびしい生活環境では、子ども、とくに男の子は老後の最も頼りになる保証であった。

女性はふつう、住居の一階にある家畜小屋で、経験のある女性の助けによって子どもを生んだ。赤んぼうは、ふつう産湯で洗われることもなく、ときには母親がなめてきれいにすることもあった。十四世ダライ・ラマは、自分の母親が十六人の子を生み、うち九人は死んだと書いている。幼児死亡率は四〇―七五パーセントという高率であった。

離婚については、なんら宗教的規制はなかった。それはふつう相互の合意によって決められた。女性の側に責任がない場合、婚資は返され、子どもは女性にゆだねられ、結婚の期間に貯蓄された財産の一部が女性にあたえられた。貧民の場合は、出会った人が別れるように簡単であった。子どもは、たいいてい女性側が引きとった。寡婦、とりわけ子どものない寡婦の立場はみじめであった。若くして夫に死なれた女性、あるいは数度夫に死別した女性は魔女とされ、尼になるしか道はなかった。

ヘロドトスは『歴史』の中で、スキタイ時代(前六―前三世紀)に中央アジアの遊牧民マッサゲタイ人の女性共有の風習をつたえ、その中で、一人の男性が女性を訪れているときは、扉に自分の矢筒をかけたのとべている。また中央アジアの歴史家ナルシャヒは『プハラ史』(十世紀)の中で、八世紀後半ブハラで反乱を起こしたムカーナの集団では女性が共有とされ、女性の部屋を訪れた男性は入口にそれとわかる物を置いて在室を知らせたことが書かれている。さらに五―六世紀の約百年間中央アジアに登場したエフタル(中国資料では嚙嚙)の風習についての『北史』のつぎの記述がよく知られている。「兄弟ひとりの妻を共にする。妻は、その夫に兄弟のいない場合、帽子に一つの角をつけ、兄弟のある場合には、その兄弟の数だけの角をつける」。また『隋書』西域伝の吐火羅の条には、エフタルとみられる住民の風習が「つぎのように書かれている。「兄弟は一妻をもち、寝を迭う。一人が妻の房に入ると、そのしるしとして扉にその衣服をかける。生子は其の長兄に属す」。この記述はチベット人の場合と全く同じである。ただし、研究者たちの多

チベットには、モノガミー(一夫一妻)とポリガミー(一夫多妻)のほかに、ポリアンドリー(一妻多夫)の風習があった。チベット人の社会には大家族はなかった。一夫多妻は、農奴主など富裕層に多かった。一般農奴の場合は姉妹が一人の夫を共有することがあった。また寡婦が再婚した場合、血縁関係のない母と娘が夫を同じくすることもあった。

一妻多夫は、多くは兄弟、まれに親しい友人どうしが共通の妻を持つ場合であった。ふつう兄がまず結婚し、後に弟が許されて、兄の妻を共有した。こうした多夫家庭の必要条件是女性が主導権を持つことで、これがなければ成立しなかった。一人の女性が複数の男性の妻として家庭を円満におさめれば、人びとから尊敬されたという。妻は定まった部屋におり、夫はかわるがわる妻を訪れたが、夫の一人が妻と同室しているときは、その夫は自分の持物を室外に置いた。別の夫は、これを見て中に入らなかった(主婦定居一房、各夫輪流同居。誰と主婦同居時、将本人的信物置室外、他夫見後、自行回避)『中国少数民族風情録』二四二ページ。

くは、エフタルがイラン系の民族と考えている。さらに研究を要するが、チベット系の可能性もあるのではなからうか。

一妻多夫がうまくいく条件の一つに、女性の主導権をあげたが、これをおしすすめると母系家族につながる。

『季刊民族学』(七十号、一九九四年秋)に発表された中国雲南省のチベット系モノ人の風習についてのカメラマン鎌澤久也の報告は、このことを示唆している。「モノ人は伝統的に母系社会を形成している。……結婚という形式をとらず、したがって、男女ともに、生家を離れることはない。生まれた子どもは母方に属し、かつては、お父さんに相当する言葉がなかったという。『父』はその実家に住みつづけるが、扶養の責任はない」。モノ人社会では、成人した女性は阿注(恋人)の男性をさがし、その男性は「妻問い婚」のような形で女性ののもとに通う。ほとんどが一对一だが、女性が一度に複数の男と阿注関係になることがゆるされている。複数の場合、男が女性の「部屋にはいるときは、かならず帽子、帽子がなければそれに代わる何かを、合図として入口の決められた場

所に掛けるのだという」。この場合も、チベット本土の一妻多夫とよく似ている。チベットにおける、こうした風習は一般に経済的理由によって説明されている。ユーゴスラヴィア・レヴュー社・中国上海人民美術出版社共編、ベイスポール・マガジン社訳『チベット』（一九八二年刊）所収のナツ・ツェンの論文には、つぎのように書かれている。「最近の調査によれば、かつて一妻多妻制の家族は、一部の諸地方では全家族の五パーセントを占め、一妻多夫制の家族は二四パーセントにもなっていた。一妻多夫制の家族は主に二、三人の兄弟が同一の妻を所有するもので、地主の課する『ヴラ』と呼ばれる賦役を軽減する目的から、貧しい人々が、この種の家族を作った」（九八ページ）。

ネパール領のチベット社会を調査した人類学者高山龍三は一妻多夫婚の存在理由として、つぎのように書いている。「財産の細分化を防ぐこと、労働力の分散を防ぐことなどがあげられるが、村と放牧地の生活、隊商参加など、男が移動することの多い生活が背景にあらう。女が家でテントを守り、北方への旅に兄が出かけると、次

の東方への旅には弟が出かけていた。若いときに兄弟力を合わせて働くのは、都合がよいかもしいれない」（『失われたチベット人の世界』一三二ページ）。私はかつてイタリアを旅行したとき、ヴェネチアの博物館で十字軍の騎士がその妻の身につけたという鉄製の貞操帯を見たことがあるが、これとチベットの風習を比べると、文化の相違はあまりにも大きい。またきびしい生活環境の中では、病気が老衰の場合、兄弟や姉妹はたしかな頼りであったにちがいない。したがって一種の社会保障であったとも考えられる。実際、若くて元気な時期は人生の一部にすぎないのだから――。

サダ県でグゲ古城を訪れたとき、ガイドのチベット人ワンラさんは私の質問にたいし、今は一妻多夫の家族はないと、決然と答えた。結婚は今では男二十二歳、女二十歳がふつうで、婚資も必要としない。子どもは、幹部は二人まで、貧しい人は制限なしのことだった。なお、一妻多夫の風習はシベリアのニヴフ人にも見られるが、この場合は親属関係による結婚の制約に基づいており、チベットとは成立の基盤を異にしている。

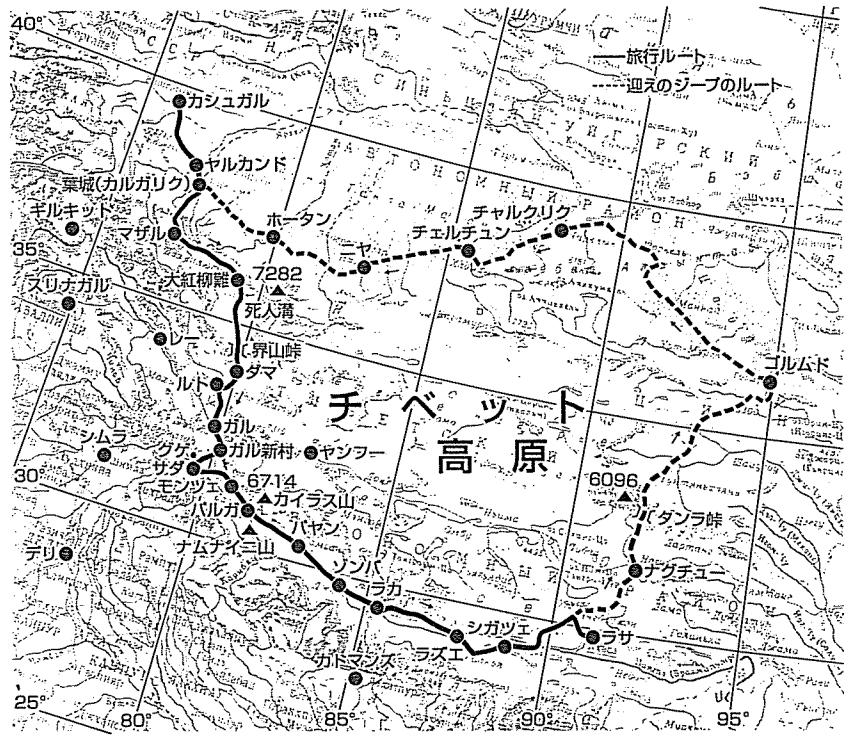


図1 チベットの旅 ルート概念図

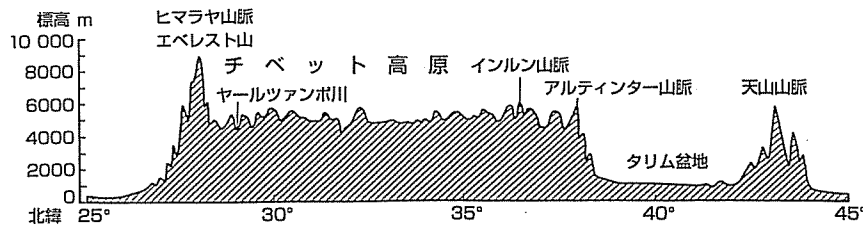


図2 東経87°の南北断面

八月十三日昼頃バヤンを出発、高い峠を一つ越えてヤールツアンポ川に出た。このあたりでも、すでに文句なしの大河の風貌をそなえていた。うす暗くなつてからゾンバという集落で、漢人の経営する小さな食堂で夕食をとった。新開地で、兵舎と検問所があり、そこでガソリンを補給した。

もはや持参のガソリンはつきていた。やたらに犬が目についた。食堂の女性が、うどんに豚肉を入れようとすると、ガイドの韓さんは、腐っていると危いからやめてほしいとことわった。私も同感だった。イスラム教徒は豚肉を食べないが、そういう禁忌のない私たちも、このくらいの自制は必要だと思った。十四日の午前三時頃まで夜道を作り、ラカという集落に着き、またもや車中で仮眠した。車中泊は、すでに三晩目だ。道はほぼヤールツアンポ川沿いに下っているの、標高もしだいに低くなり、呼吸もかなり楽になった。しかし、道路は大水でこわれている箇所が多かった。

八月十四日、早朝からまた走りはじめ、幾つかの川を

越え、ラズエで満々たる濁流のヤールツアンポ川をフェ

リーで渡った。このフェリーは、岸辺の高い場所につくられた回転する巻き上げ装置を、女性たちが数人で巻き上げるようになっていた。渡り終わると、道路ぞいに数軒の食堂などの店がならんでおり、私たちはその一軒で食事をした。今夜の泊まりは、ここから二五〇キロほど先のシガツエである。到着は夜半かも知れないが、ここには近代的な設備のホテルもある。シャワーも使えるはずだとみんな期待していた。食堂の前には、これまでには見かけなかったチベット人の物乞いが何人もいた。子どもをおぶったり、抱いたりした女性も混じっている。彼女たちの衣服は、西チベットの牧民たちよりも堂々とした。それなのに物乞いをしている。しかし物乞いも堂々としていた。私はロシアのジプシーを思い出した。ヤールツアンポの渡しを境に、川の東側にはラサヤシガツエなど、大きな都市の影響が否定的な形で現われているのだろうか。道路は葉城からラズエまでは二一九号線で二一六〇キロ、ラズエからラサまでは三一八号線で四三〇キロであった。

五、シガツエからラサに到る

暗い中を峠を越えたりして夜十二時頃、待ちこがれたシガツエのホテルに着いた。急いでカウンターに行ったところ、予定よりおくれたために予約はキャンセル、部屋は一つもないという。みんな言葉も出さず、ロビーに座りこんだ。私は、部屋がなければロビーまたは廊下でもいいから仮眠させてほしいと頼んだ。ないものは仕方がない、あるもので生きるよりほかはないのだ。私は「シベリア魂」の持主だ。幸い、二階に広い廊下のような場所があり、みんな着のまま眠った。

八月十五日、シガツエのホテルで、葉城出発以後はじめて朝食らしい朝食をとった。天気はよく、みんな昨日までのきびしさを忘れたようにタシルンポ寺（一四四七年建）を見学した。この大寺院はラサのガンタン（一四〇九年建）、デブン（一四一六年建）、セラ（一四一八年建）とともに、ゲールクバ（黄帽派）四大寺の一つに数えられる。いずれも明代の建築で、山を背負っているところに特徴がある。タシルンポとは吉祥須弥山の意で、シガ

ツエ市街の南側ネセリ（尼色旦）山の南麓に位置し、最盛期には四千四百人の僧侶が住んでいた。一六六二年以後、パンチエン・ラマの転生者によって支配され、グライ・ラマの住むポタラ宮と相対する位置を占めたが、歴史的には宗教的というより政治的に重要な役割を果たした（山口瑞鳳「チベット」下巻、三三七ページ）。トサンリン、シエゼ、ギャイカン、アバの四ブロックに分かれ、礼拝堂五十六、室数二百三十六室、敷地面積二〇〇万平方メートルを占め、ポタラ宮ほどではないが、金色の屋根が光り輝いて、遠くからでも見る人に壮麗の感をあたえる。

ここでは二つの部屋がとくに印象的だった。一つは、向かって西側にある金銅の大弥勒坐像である。これは一九一四年に完成したもので、高さ二六メートル、耳の長さ二・八メートル、中指の長さ一メートルである。鑄造には銅一万五〇〇〇キロ、金六七〇〇テール（一テールは約三七・七八グラム）、真珠、琥珀、サンゴ、宝石など千四百個が用いられた。この手のものでは、世界最大という。弥勒像は蓮台に坐し、衣服をつけていた。もう一つは一九九三年九月四日に完成公開された十世パンチ

エン・ラマ(一九八九年一月二十八日死亡)の霊塔であった。霊塔のある広間も見事だった。十世パンチエン・ラマは、中国政府に協力的であった。中国政府は霊塔と広間のために六〇〇〇万元と金六〇〇キロ、銀二七五キロを提供した。インドに亡命中のダライ・ラマを意識し、チベット民衆の心情に配慮したものと考えられる。十世パンチエン・ラマの転生者は、すでに見つかつたといわれるが、私はまだ事実を確かめていない。

タシルンボ寺のチャム(宗教的な仮面舞踏のある祭礼)は有名である。私はかつてブータン旅行のとき、パロでチャムの踊りを見たことがある。チャムについては多くの報告や写真があるので、ここではマスクについて、シペリア民族学との関連で一言したい。

仮面舞踏のマスク

シペリアで知られている最も古いマスクは、エニセイ川中流部のタガール文化(前七―前三世紀)とタシユティク文化(前―紀元五世紀)の粘土製マスクである。これは死後まもなく、死者の顔面に湿った粘土を置いて型ど

つたもので、マスクの目、鼻、口の部分に小さな布切れを置いたものも見られる。このようなマスクの意味については、民族学的に幾つもの解釈がある。その一つは、死者の悪霊から生者を守るためというものである。別の有力な見解は、死者が死後の世界で自分の落ちつくべき同族をさがすための手段の役割を果たすというものである。

また、シャーマンのマスクは、悪霊とのたたかいでシャーマンを守り、生者には見えない世界への道を見出す能力をあたえるものとされている。つまり現世ならぬ世界のための顔というわけである(ゲラシモワ『チベット人の伝統的信仰』一三三ページ)。マスクのもつこのような意味とチベット仏教のマスクとの関連については、さらに研究される必要がある。ここで一つ興味深いことは、インドやチベットの諸民族においては、頭部の七つの穴が悪霊の出入りする道である、とくに口がそうだと観念があるというが、これと、さきあげたタシユティク文化のマスクに置かれた小布切れとの関係である。偶然の一致にちがいないが、考えさせられる。

*

タシルンボ寺の見学が終わって、ジープの待つ門前に出てみると、また一つ予期しない出来事が起こった。一日からエンジンの調子のわるかった一台のジープが、誰にもことわるることなしに、勝手にどこかの整備工場へ行ってしまい、待っても待っても帰ってこない。ラサマでは二九〇キロ、舗装道路ではあるが五時間はかかる。今日ラサのポタラ宮の閉門時間に間に合わなければ、明日は成都へ出発する予定になっているので(ガルで本多さんと韓さんがそのように予定を組み直し、ウルムチやラサへ連絡してしまった)、ポタラ宮(博物館)は見学できないことになる。私は以前一度来たことがあるのでかまわないが、他の仲間たちは、ポタラ宮に足を踏み入れることもできずに帰らねばならない。

そこで、行先不明の一台をさがすために韓さんのジープを残し、あとは定員いっぱいに乗り合わせてラサへ急ぐことにした。川沿いの新道をたいへんなスピードで走った。西側は断崖になっており、はらはらし通しだった。夕日も傾いた頃、広い盆地に入り、ラサ市内を見守るよ

うに摩崖に彫られた如来像に無事到着のお礼を申しあげた。ラサ川は増水し、断崖の近くまで迫っていた。ポタラ宮は遠くからも夕日に映えていた。それは忽然と壮麗な全容を現わした。きびしい自然と、自分たちの貧しいテントしか知らないチベットやモンゴルの牧民たちが、この宮殿の偉容を目にしたとき、どんな気持ちになるだろうか。観音菩薩の化身としてのダライ・ラマの御座所としか考えられないのではなからうか。私たちがポタラ宮の門前に着いたのは五時すぎ、つまり閉門直後であった。ガイドの石さんが自分の勤務している青年旅行社に電話して、特別のはからいで一人の見学者もいないポタラ宮に入り、ひと通り見学することができた。内部は大規模な補修を終えたばかりであった。

ポタラ宮はたしかにチベット建築の精粹であり、その中にはチベット美術の至宝が収蔵されている。マルポ・リ(紅山)という岩山の南麓にあり、主殿は十三層、高さ一一七・一九メートル、東西三六〇メートル、南北約一四〇メートル、建築面積は九万平方メートル、正面に三本の石の階段、北西と北東に坂道がある。壁は厚さ二

一五メートルの花崗岩で積まれ、石と木材を併用した宮殿、仏堂、習経室、寢宮、庁舎、靈塔殿、ラマ養成の学校、ラマの居室のほか、大集会場、東大殿、日光殿、中殿（バルカン）などが、多くの階段、廊下、広間などによつてつながっており、よほどの専門家でない限り、内部の全容を知るのは難しいと思われた。今回気づいたことだが、ポタラ宮内の幾つかの文様がモンゴルのもので共通していた。五座のダライ・ラマ靈塔殿がある。規模はちがうが、型式はみな同じである。うち五世（一六一七—一八二二年）と十三世（一八七六—一九三三年）のものが最も大きい。ポタラ宮の今の規模は、五世のとき着手され、その死後の一六九三年に完成したのである。ダライ・ラマ五世はもとデブン寺の住持としての活仏であった。この住持は「ゲルク派の政治的な活動集団の精神的な拠りどころではあったが、別にチベット国王になる予定をもった者は誰もいなかった。ところが五世のときにそれが転がりこんできたのであった」（山口瑞鳳「チベット」上、二二五ページ）。この歴史的いきさつは、さておいて、私はポタラ宮内の薄暗にならぶ無数の原色の彫像や壁画

を見ながら、ふと、この世界に反逆したダライ・ラマ六世（一六八三—一七〇六年）のことを思った。彼は歴代ダライ・ラマの中ではただ一人放蕩に身をもち崩し、青海西南部のクンガノール湖畔でさびしく二三歳の生涯を閉じた。しかしチベットの詩に音楽性を持ちこんだ天才的詩人で、現在でもチベットで彼の詩を知らない人はいないといわれる。私は一九八〇年、セラ寺のラマから歌になった六世の詩を録音したことがある。その詩集は中国語、英語、ロシア語などに翻訳出版されている。そのうちの三首を山口瑞鳳の訳によつて紹介しよう。

ひがしのかたの山の嶺から

ほの白い月が昇った。

まだ母ならぬ娘の顔容も

心の嶺に次第に円かになった。

去年種を蒔いた弾力ある麦の茎も

今年はもう薬の束の山になった。

若々しかった男も老いてその身体は

南方の弓よりもさらに曲った。

野鴨は沼に恋い焦れて

しばらく留まりたいと思ったが、

沼には白氷がはりつめたので、

がっくり気をおとして立ち去った。

ダライ・ラマ六世は、ダライ・ラマが所詮飾りもので、早晩のぞかれる可能性のあることを察知したのかも知れない。一七五一年から一九五〇年までの期間の七七パーセントは摂政による統治だったのである。十三世をのぞけば実に九四パーセントを占めている。

私たちは急いでジョカン（大昭）寺へ向かったが、見学のためにはすでに遅すぎた。しかし寺のまわりの八角街（バルコル）の雑踏には驚いた。一九八〇年の旅行のときは露店はほとんどなく、人出も少なかったが、今回はたいへんなにぎわいであった。ハタや装身具、薬品、骨董品、日用品などさまざまな品物をならべた店が八角街全周に切れ目なくつづいていた。その人ごみの中で、

五体投地の祈りをつづける巡礼の姿もあった。

ラサの人口は、今では二十万を越えるという。シベリアのブリアート・モンゴルの学者ゴンボジャブ・ツイビコフ（一八七三—一九三〇年）が一八九九—一九〇二年チベットを訪れたときには、ラサの人口は一人ほどだった。彼のラサ入りは日本の河口慧海より約半年早い一九〇〇年八月であり、ペテルブルグ大学卒の僧として見事な旅行記『チベット聖地での仏教徒巡礼』（一九一九年）を残しているが、残念ながらまだ邦訳されていない。八角街で医薬品を見たついでに、シベリア・中央アジアと関係の深い「チベット医学」についてふれてみたいと思ふ。

チベット医学について

シベリアのブリアート人はモンゴル系であり、チベット仏教の信者が多い。かつて、この仏教徒の中にはチベットへ留学や巡礼に出かけたものも多く、チベットから大量の経典や医学書をブリアートに持ち帰った。さき

のべたツイビコフひとりでも、三百三十巻のほる貴

重なる書物を運んできている。旧ソ連時代以後、ブリヤート共和国の首都ウランウデに科学アカデミーの支部があり、これらの書物に基づくチベット医学の研究がさかに行なわれてきた。以下、私は主として、その研究所のエリベルト・バザロンの研究によって若干の問題を紹介したいと思う。

チベット医学の根本聖典は『四部医典』で、一般にチベット医学の一時代を画した大学者ユトク・ゲンポ（十一世紀）がインドのほか中国やイランの影響をうけて著わしたとされている。これにたいしバザロンは、『四部医典』が古代インドの医書『アーユル・ヴェエダ』の原理に基づいており、インドの医者ジワカ・クマラによって前六世紀に書かれ、後代にチベット語に訳されたものとしていっている。ただしサンスクリットの原典は見つかっていない。その『アーユル・ヴェエダ』の基本になっているのは、前七世紀以前チャラカという人の書いた『ツアラカ・デ・ジャド』という医書である。

前七世紀には、すでに今のベナレスとタキシラの大学に医学のセンターがあつて、著名なパンデイト（医者、

典の図録は中国、アメリカ、ロシアで刊行された。

ここで、中央アジアの視点から見逃せないのは『四部医典』とブラハ生まれのアラブの大学者イブン・シーナと後者の第三・第四の書、薬品を扱った前者の第四巻と後者の第五の書の類似は著しい。薬品については、粉末、丸薬、煎じ薬、油など見出しと術語が共通している。また多くの点で基本的観念が似ている。

中世アラブの歴史家イブン・クタイバ（九世紀）は、アラブ世界の最初の医学校は三―四世紀、イランのジュディシャプル市に移住したインドの医者たちによつてはじまったとつたえている。一方アラブの医者も、ブルズヤのように、インドに留学して学んだものもある。イブン・シーナの医学は、こうした伝統の上に成立した。イブン・シーナはアムダリヤ下流部のホレズム王国の図書館でアラブ語、ペルシア語に訳された古代インドのチャラキやスーシユルタの著作を研究した。すでにのべたように、これらの著作は『四部医典』の基礎を構成しているものである。つまり、両者の基盤は共通していたので

スーシユルタやアトレヤが活躍した。やがて医学は仏教と結びついて伝統は絶えることなくつづき、大学者ナーガルジュナ（二―三世紀）の弟子パーグヴァタの名著『八支心髄集』が現われた。この本と『四部医典』との間には、術語上の共通点が少なくないという。七世紀、ソンツェン・ガンポ王の治世にインド医学はチベットに入った。ティソン・デツェン王（七九〇―八四五年）の時代に、インドの医者チャンドラナダとワイロチャーナによつて『四部医典』のほかナーガルジュナやパーグヴァタの著作がサンスクリットからチベット語に翻訳された。『四部医典』は一八九八年に、すでにブリヤートのラマ医者バドマエフによつてロシア語に翻訳出版された。この人物は一八五七年、当時の東部シベリア総督ムラヴィヨフの推輓によつてペテルブルグへ招かれ、ペテルブルグの陸軍病院で医療に従事した。彼はやがて、皇帝アレクサンドル三世を教父としてロシア正教の洗礼を受けている。

最近ブリヤートのチベット学者ダシエフによる『四部医典』のロシア語新訳が刊行され（一九八八年）、この古

ある。

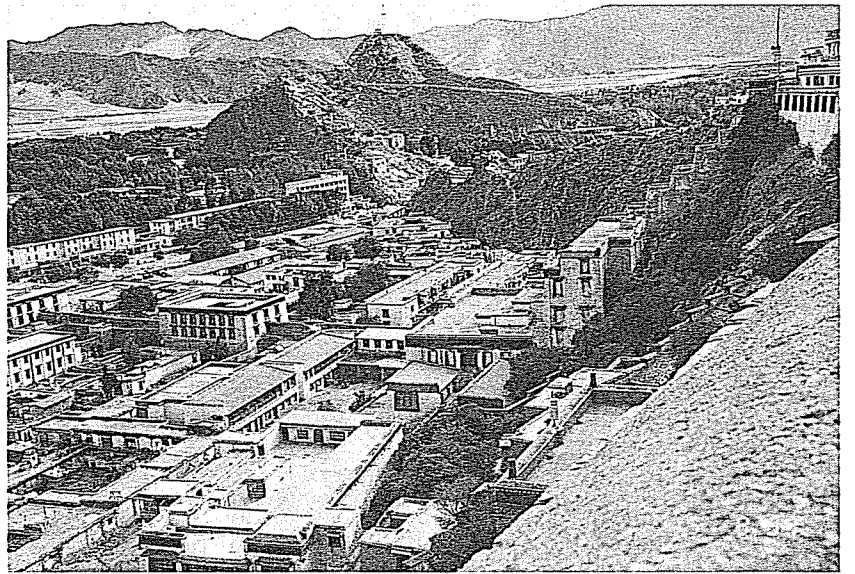
チベット医学の基本理論は人体が三要素からなるとする三因学説である。三要素とは、slung（中国語では明または隆、英語ではwind）、mkhis（赤巴、bile）、bad-kan（培根、bilegma）のことで、日本語では便宜的に気、胆汁、粘液と訳されている。この三要素のバランスが保持されれば健康であるが、それが崩れると病気になる。病気には四百四病がある。このバランスは食物だけでなく、性別、年齢、四季、十二支、時刻、天体の運行などと深く関連している。

『四部医典』によると、人間の一生は十六歳までが童年、その七十歳までが壮年、それ以後が老年であるが、童年期には粘液、壮年期には胆汁、老年期には気のバランスが崩れやすい。また生まれながらにして気の要素を大量に持った人がいる。こういう人は青白く痩せており、よくしゃべり、寒さや風に弱い。よく笑い、歌い、争いを喜ぶ。動物で言えばカラス、キツネのイメージである。こういう人は早死する。胆汁の人は飢渴に弱く、頭脳は鋭く、誇り高い。また汗っかきで体臭が強い。甘いもの、

辛いもの、渋いもの、冷たいものを好む。動物で言えば虎、猿に近い。寿命は中位である。粘液の人は大がらのよく太った色白の人に多く、飢渴や寒暑に強い。よく眠り、寿命も長い。しかし実際には、人がこの三要素の二つまたは三つを兼ねている場合が多い。

健康と四季の関係で見ると、冬が最も体力の充実した季節である。したがってセックスもこの時期が推奨され、この季節に妊娠した子どもは生命力が強い。反対に夏は体力の最も弱る季節で、春と秋はその中間である。『四部医典』のすすめる長寿法がある。まずどうしたら長寿になれるか、その方法を知り、実践することである。老年になれば、心を楽しませるような閑静な場所に住み、官能的欲望から身をつつしむべきである。やむを得ない場合には、星辰の位置が「吉」にある日を選んで女性に近づくべきである。また直射日光を避け、心身の苦しみを避け、なま物、酸っぱいもの、塩辛いものを食べないことである。

以上は全くの断章にすぎないが、一つ、壮年が七十歳までというのは傾聴すべき説であると思う。



ラサの旧貴族の邸宅

*

八角街からまっすぐホテル・ホリディンに入った。設備といい食事といい、これまでとは雲泥の差であった。それだけに、ラサとシガツェだけでは「チベット旅行」にならないことも確かだと思った。

ラサから成都、上海を経由して、八月十九日、東京に帰着した。檜原さんは少しおくれで帰国したが、今はすっかり元気をとりもどしたとのことで、みんな安堵の胸をなでおろした。

以下、檜原さんに終始つきそっていた本多さんの簡単な報告を掲載する。ことに登場する山男たちの献身的行為は、この世が結構捨てたものでないことを実感させてくれる。話にきくと、ガモ・ボックスのおかげで通じが良くなり、体内のものが排出されたというから、血色がよくなったのもこのせいではなからうか。

彼女が助かった要因のひとつに日本人登山隊の五人のメンバーの助けがありました。八月十日の夜ガルのホテルに泊っていた彼等は、我々のチベットのドライバー、ツノンさんに連れられ病院に現われまして、檜原さんの

容態を見て、自分達の持っているフランス製の気圧を下げるガモ・ボックスに入れてみては？ と提案がありました。万一失敗した時は本多さんの責任ということではないでしょうかと云われ、一瞬たじろぎましたが、私も一か八かの決意で依頼しました。彼等は朝までこの袋の気圧のポンプを押し続け、一睡もしないどころか、大事な日程を一日のばして檜原さんに水を飲ませ、名前を呼び看護してくれました。結局このガモ・ボックスは余病のある人には使わないほうが良いとの情報が入りまして、朝十時には止めましたが、その時の檜原さんの血色が良くなり、私は助かるかと確信、ヘリコプターの救援を待つことができました。毎晩徹夜で看病してくれたガル人民病院の医師、看護婦、ウルムチから来た若者ドライバーの段さんとツノンさんら多くの方々の献身的な看護は私の心にすばらしいものを教えてくれたような気がします。

十一日に来る予定のヘリコプターは雷のため十三日午後二時軍の兵舎の裏の小さな飛行場に到着。二人の医者が一緒でした。やがてタンカに乗せられ、私と檜原さん

はへりの中へ。長かったガルの村を飛び立ち、私達の走って来た道を三十里営房まで二時間半かかって引返し、そこで給油してカシユガルまで二時間半、カシユガルで待機していたジェット機で北京へ。到着後、中日友好病院に入院、治療、退院。八月二十二日無事成田に帰着いたしました。本当にホッといたしました。

すでにのべたように、今度のチベット旅行は粗食に耐えながら、昼夜をわかたずひたすら駆け抜けたようなものだった。帰った当座は、もうこりこりだと思っただが、あれから半年たった今になると、こんどはゆっくりと、もう一度出かけてみたくなってきた。西行は「年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」と歌ったが、ついに私たちに姿を見せなかつたカイラス聖山を、いつの日か遠望したいと思う。そのうちに旅行の条件ももっと整備されることだろう。

付記。終わりに、このつたない旅行記を発表する機会をあたえて下さった東洋哲学研究所の方々に深く感謝する。内容にあやまりがないとの自信はないが、私なりに新しい視点でチベットを見る努力をしたつもりである。

参考文献

- 山口瑞鳳『チベット』上下 東京大学出版会、一九八七—八八
- 長野泰彦・立川武蔵『チベットの言語と文化』冬樹社、一九八七
- 高山龍三『失われたチベット人の世界』日中出版、一九九〇
- カルピニ、ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、一九六五
- ユーゴスラヴィア・レヴュー社・中国上海人民美術出版社編『チベット』ベースポール・マガジン社、一九八二
- 鎌澤久也『瀘沽湖畔のモソ人』『季刊民族学』七〇号 千里文化財団、一九九四
- 范玉梅、吳碧雲、開斗山、游智仁、邝東『中国少数民族风情録』四川民族出版社、一九八七
- 安旭『藏族美術史研究』上海人民美術出版社、一九八八
- 西藏自治区文物管理委员会編『古格故城』上下 文物出版社、一九九一
- 馬書田『中国佛教諸神』團結出版社、一九九四
- G. Tsytkov, Izbranye trudy, I—II, Novosibirsk, 1981. (ツィシコフ選集)
- E.G. Bazaron, Ocherki Tibejskoj meditsiny, Ulan-Ude, 1984. (チベット医学概説)
- A. Tom Grunfeld, The Making of Modern Tibet, Zed Book Ltd, 1987.
- K.M. Gerasimova, Traditsionnye verovaniya Tibeitsev v kul-

tovoi sisteme lamaizma, Novosibirsk, 1989. (ラム教の信仰体系におけるチベット人の伝統的信仰)

China's Tibet, winter 1933 (A quarterly review of Tibetan news & views), Beijing, 1993.

(かとう きゅうぞう・創価大学教授)